

1 総合評価

(1) 評価ランク A

(2) 評価に至った理由

「第2 業務運営の効率化に関する事項」、法人の主要な業務である研究開発を含む「第3 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する事項」及び「第5 その他業務運営に関する重要事項」については、中期目標を十分達成した。一方、「第4 財務内容の改善に関する事項」については、中期目標をおおむね達成したが、一部、未達成であった。全体としては、中期目標を十分に達成したと判断し、Aと評価した。

(3) 総合所見

独立行政法人農業生物資源研究所（以下「生物研」という。）は、国民生活及び社会経済の安定に資する農業の生産性の飛躍的向上や、農産物の新たな需要・新生物産業の創出に不可欠な生物機能の効率的利用技術の開発と、これを支える基礎的研究を、業務運営全般の効率化を進めながら行うことが求められている。このような観点から、中期目標期間の実績について調査・分析し、評価した結果は以下のとおりである。

トップマネジメント機能の発揮については、理事長のリーダーシップの下、中期目標の重点的な達成に向け、「ゲノムリソースセンター」の設置、「昆虫遺伝子機能解析研究センター」など3つの研究センターの設置等により、研究の重点化・集中化が行われた。また、中期目標期間中に、「遺伝子組換え研究推進室」が設置され、研究の推進及び成果の公表を強化する体制が整備された。さらに、職員のインセンティブ向上のための表彰制度の創設、スペース課金による研究スペースの有効利用とコスト意識の啓蒙等の取り組みが行われており、評価できる。

主要な業務である研究開発については、ゲノム科学研究領域において、国際的リーダーシップを発揮して、農業及び生命科学の発展に貢献し、数多くの顕著な業績を上げるなど、中期目標を十分達成した。特に、イネゲノムの全塩基配列の決定や出穂期関連遺伝子、脱粒性遺伝子などイネ有用遺伝子の単離などは特筆すべき成果である。

管理・運営については、組織整備により、業務運営の効率化を図ったことは評価できる。また、若手表彰制度を創設するなど、職員のモチベーションの向上に取り組むとともに、国内外の研究機関等との連携・協力体制を強化している。財務運営については、研究課題ごとの投入資源と成果の対比を明確にしようとした努力は評価できる。なお、今後、経費の一層の削減に向けた対策の検討や内部監査体制の充実等経営管理体制の強化について引き続き努力する必要がある。

2 各大項目ごとの評価

第2 業務運営の効率化に関する事項

評価ランク A

評価に至った理由及び所見

中期目標を十分達成したと判断し、Aと評価した。

全体の戦略目標に沿うように個々の研究の目的を明確にして、独法として推進すべき研究の重点化にはある程度成功している。「遺伝子組換え研究推進室」の設置とその活動は、基礎研究の出口を確保するための基盤整備に大いに貢献した。ピア・レビュー方式の評価、業績評価マニュアルの整備、研究グループ長の裁量に委ねる予算配

分方式等、自己点検システムが、整備され充実した点も評価できる。イネ、カイコなどにおいて国際的な連携の下で研究を推進し、学術的に顕著な業績をあげている。事務処理の簡素化、管理経費の節減などについて効率化に取り組んでいる。なお、研究職員の業績評価結果は、研究職員の処遇に反映させる必要がある。

項目ごとの所見は以下のとおりである。

『 1 評価・点検の実施 』

ピア・レビューの実施等による評価、業績評価マニュアルの整備、研究グループ長の裁量に委ねる予算配分方式等、自己点検システムが、この中期目標期間において整備され充実した点は評価できる。今後は、評価結果の反映方針を明確にし、業務運営に適切に反映させることが必要である。研究職員の業績評価が実施され、研究管理職員については、処遇に反映させた。今後、評価結果を研究職員の処遇にも反映させることが必要である。

『 2 研究資源の効率的利用 』

競争的資金の獲得件数は、初期に比べると顕著に増加しているが、獲得額は伸び悩んでおり、一層の取り組みが必要である。遺伝子組換え作物の開発研究については、新たな隔離圃場を整備し、研究体制の充実を図ったことは評価でき、引き続き推進されることを期待する。

『 3 研究支援の効率化及び充実・高度化 』

技術支援職員への研修、ポスドクの雇用など研究支援体制等の高度化のための取り組みが行われている。知的財産権の取得と技術移転業務の強化に向けて、「技術移転科」を設置し、特許などに係る研究支援を充実・高度化し、知的財産権の出願件数が目標値を上回ったことは評価できる。有料オンラインジャーナルについて、他法人とのマルチライセンスの共同利用などにより、積極的な取り組みがみられた。

『 4 連携、協力の促進 』

イネ、カイコなどにおいて国際的な連携の下で研究を推進し、学術的に特筆される成果を数多くあげていることは評価できる。また、他の研究機関との連携を深める一方、独自性を示すことにも成功していると評価できる。

『 5 管理事務業務の効率化 』

事務処理の簡素化、管理経費の節減、各種のオンライン化などについて効率化を図っており、効果がみられる。今後とも、管理事務業務の効率化について、一層の取り組みを期待する。

『 6 職員の資質向上 』

「NIAS 研究奨励賞」、「NIAS 創意工夫賞」等により、職員のインセンティブを高める工夫がみられる。また博士号取得を法人として支援することで取得率が上昇しており、職員の資質向上に寄与していると評価できる。

第3 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する事項

評価ランク A

評価に至った理由及び所見

中期目標を十分達成したと判断し、Aと評価した。

植物科学研究では、イネゲノム塩基配列の完全解読は特筆すべき歴史的成果である。さらに国際イネアノテーション計画を組織し、国際協調下でイネの情報基盤整備を主導的に実行し、データベースとして公開したことは、植物科学の基盤整備に大きく貢献した。花粉症緩和米など、健康増進のための新機能イネの開発も重要な成果である。昆虫科学研究では、カイコのゲノムの80%をカバーする物理地図を作成した。動物科学研究では、移植医療への貢献が期待されるクローンブタを作出した。基盤研究では、海外での遺伝資源の探索収集等を行ったほか、遺伝資源の新たなリソースとして世界と日本のイネ・コアコレクションを作成し、配布を行った。これらの成果は、学術的に国内外から高い評価を受けており、また、生物研の重要なミッションを達成したものである。なお、生物遺伝資源については、利活用の一層の促進を期待する。

項目ごとの所見は以下のとおりである。

『1 試験及び研究並びに調査』

「3-1-ア ゲノム生物学等を利用した生命科学研究」については、卓越した成果をあげた。イネゲノムの全塩基配列解読を完了した。本成果は国際コンソーシアムによって成し遂げられたが、半分以上は本研究で達成された。この波及効果は大きく、わが国のみならず世界的レベルで植物科学分野において顕著な貢献をしたことは高く評価できる。また、これらの成果に加えて、脱粒性遺伝子の単離や出穂期関連遺伝子群の同定と相互作用の解明は、画期的な業績である。カイコゲノム解析については、一定の成果をあげたことは評価できる。今後は、生理・生態との連携を期待する。

「3-1-イ 農林水産業の飛躍的発展を目指した革新技术の開発」については、機能性を増強した米の作出に成功し、花粉症緩和米のマウスによる効果確認も行われた。個々のテーマは目標を達成しているが、大きな目標に向けて、組織的、体系的な取り組みを期待する。

「3-1-ウ 新産業の創出を目指した研究」については、絹タンパク質とは異なる機能を有するホーネットシルクが新規素材として有望なことを確認するなどの成果が得られた。市場性のあるものを生み出すため、更なる努力を期待する。

「3-1-エ バイオテクノロジーを支える基盤技術の開発」については、イネミトコンドリア、野生イネ及びサトウキビ葉緑体、イネ白葉枯病菌の全ゲノム塩基配列決定や、オオムギ条性遺伝子の単離などの成果が評価できる。

「3-1-オ 生物遺伝資源の収集、評価、保存・増殖、配布、情報管理」については、新たに世界イネ・コアコレクションと日本在来イネ・コアコレクションを選定するなど着実な進展があった。

『2 専門研究分野を活かした社会貢献』

学術講演会などを積極的に開催するとともに、国や団体などが主催する各種講習・研修会へ多数の講師派遣を行った点は評価できる。行政、国際機関、また学会などの要請に応じて積極的に専門家派遣を行い協力した。イネ遺伝子発現解析、作物病害の診断、繭・生糸の品質鑑定、放射線依頼照射を行うことで社会へ貢献したことは評価できる。今後とも、一層の取り組みを期待する。

『3 成果の公表、普及の促進』

中期計画の目標値を超える普及に移しうる成果を選定し、主な研究成果のフォロー

アップを行った。今後とも、フォローアップ調査による成果の普及状況の把握に努めるとともに、結果を分析し、成果の普及に役立てることを期待する。論文数について、中期計画の目標を達成した。生物研の重要なミッションに基礎研究の推進があることから、今後、論文の質をさらに向上させる取り組みを期待する。中期計画の目標値を大幅に越える特許の出願を行い、特許実施許諾収入が増加していることは、評価できる。今後はさらなる実施許諾に向けた取り組みを期待する。プレスリリースなどを利用した情報の発信も着実に進んでいることは評価できるが、なお一層の取り組みを期待する。

第4 財務内容の改善に関する事項

評価ランク B

評価に至った理由及び所見

中期目標をおおむね達成したが、一部、未達成であったと判断し、Bと評価した。

近年、受託収入を含めた外部資金が減少しているものの対策が明確にされておらず、また、経費の節減状況の要因分析及び新たな節減対策への取り組みも不十分である。今後、外部資金獲得に向けた取り組みの強化と経費の一層の節減に向けた抜本的な対策を検討する必要がある。施設整備費補助金で施工した改修工事の監督及び検査が十分でなかったこと等を踏まえ、内部監査体制の充実等経営管理体制の強化を図っているが、引き続き、努力することが必要である。競争的資金の採択件数、採択率が、年々増加し、科研費獲得額が大幅に増加したことは評価できる。運営費交付金の削減が求められる中、競争的研究資金以外の自己収入についても、増額に向けた取り組みを期待する。また、所内公募予算「研究活性化経費」を設け、研究の活性化・重点化を図った。中期目標期間中に研究資源の投入と成果との関係性を分析した点は評価できる。今後、分析結果を研究資源の効果的な配分に活用することを期待する。

第5 その他業務運営に関する重要事項

評価ランク A

評価に至った理由及び所見

中期目標を十分達成したと判断し、Aと評価した。

施設及び設備については、業務実施上の必要性及び既存の施設、設備の老朽化に伴う施設及び設備の整備改修を計画的に実施している。人事については、人材の確保において、公募の比率が高まるなど採用の透明化が進んでいる。特に、研究グループ長及び研究チーム長の公募やポストクの雇用などにより、人材の確保に努めている点は評価できる。なお、大型資金獲得の力のあるリーダーをそれぞれの領域で確保することも重要である。

(参考) 本評価において用いた評価ランクは以下の3段階である。

A：中期目標を十分達成した

B：中期目標をおおむね達成した

C：中期目標をある程度達成しているが不十分であった